

巻頭言

月日の過ぎ去るのは早いものである。初めて宇宙研に来て衛星プロジェクトに関わった頃はどこへ行っても最も年下で、毎日が知らないことだらけだった。それらの日々はいつの間にかどこかへ過ぎ去ってしまい、ふと気がつくと、自分より若い人が殆どという状況に戸惑っていたりする。私が初めて本格的に惑星探査に関わるようになったのは「かぐや」であった。このプロジェクトで初めて自分の技術と呼べるものを投入してイオン質量分析器を開発し、それまで誰も見たことのなかった月周辺イオンのデータを手にすることができた。そして初めて物質の質量を知ることの奥深さと面白さを体感することができた。衛星搭載観測装置の開発に関わると毎回のことではあるが搭載準備完了まで失敗や問題発生の連続であり、一瞬たりとも心の休まる時は無かった。特にこの時の質量分析器には電圧差3万ボルトというそれまで使ったことの無い超高電圧を使用する必要がある、繰り返す放電を如何に防ぐかを考え続けた日々でもあった。我々はこの質量分析器を宇宙研D棟3階の実験室で開発し、かぐやの運用はその一つ上の4階にできた運用室で行われた。それまで数年にわたって格闘して来た質量分析器が月の周りを飛んでおり、それをすぐ近くの部屋で操っているというのは不思議な感覚であったが同時に大きな満足感を得た瞬間でもあった。いま「はやぶさ2」がリュウグウで活躍しているが、遠く離れた装置を操る緊張感と面白さはわかる気がする。この時以来、私は観測で得られるパラメータのうち、質量の虜となった。現在も質量分析器の開発を続けているのはこの故である。これから先も、日本は月そして火星よりもっと遠い世界へと出かけて行くに違いない。私自身が手を動かす機会は減っていくだろうが、この面白さを次の世代に伝えて新しい世界をみてみたい。かつて授業が終わると「少年老い易く学成り難し・・・階前の梧葉已に秋声」とわけも分からず暗唱させられた遠い記憶がある。もう少年では無いがこの言葉を思い出して精進することにしてしよう。

齋藤 義文(宇宙科学研究所・太陽系科学研究系)